

研究又は活動のテーマ	地震災害と災害復旧に関する学習
団体名	山梨県立青洲高等学校
代表者	千野 喬司

(目的) 世界的な温暖化によって想定外の大雨が頻繁に起こり、多くの地域が洪水による被害を受けている。更には、南海トラフ地震や首都直下地震の発生が現実味を帯びている。これらの自然災害の発生は、国の存続をも左右するような想像を絶する被害をもたらす極めて危機的な問題だと考えられる。

こうした状況下で国土強靱化の命を受けた土木技術者が人々の生活や生命を守るために尽力していることを本校土木工学科の生徒達には知って欲しい。そして、土木工学を学ぶことの意義を感じて欲しい。そのためには、教室内での震災を絡めた土木の専門的な学習は勿論、実際に被災地を訪れ、現地の状況を見たり、現物に触れたりする機会を設ける必要があると考える。

本活動は、地震災害と災害復旧に関する学習をテーマとして、東日本大震災を題材に、震災によるインフラの被害やその復旧、震災地域の復興について、現地での体験を通して学習することとしたい。また、本活動を通して土木技術者が我が国を存続させるために必要不可欠な存在であることを認識させ、建設業への入職促進につなげたい。

(概要) 本活動は実際に被災した現地の方の生の声を聴くことを軸としている。そのため、見学地毎に語り部やガイドを依頼し、当時の状況について心情を交えて説明していただいた。震災を体験した本人と直接対面すると場の雰囲気が一変して、生徒たちの表情が引き締まり、自然と主体的に学ぶ姿勢がつくられた。語り部の一言一言には臨場感があるため、共感性が高まり震災についての捉え方が変化していく様子が見受けられた。

当時のままに残された震災遺構から津波の脅威を感じるとともに、その側らに建設された防災構造物の重要性を認識することで、建設業を通して多くの人々の命や生活を守りたいという思いが芽生え、土木工学を学ぶ意義を見出していた。

[事前学習]

東日本大震災発生時に未就学児(5歳)であった生徒たちには当時の記憶がなく、被災地から遠く離れた地で生活していると震災に興味を持つきっかけもないため、被災状況を知らない者も少なくなかった。事前学習で津波の映像を流したが、現実味が感じられないといった反応を示す生徒もいた。

[石巻南浜津波復興祈念公園]

AR防災アプリの活用により、南浜地区及び門脇地区の震災前後と現在の風景を見比べられた。どのような意図を持って現在の街並みが整備されたのかを、周辺に建てられたマンションや盛土して通された道路の防災機能とともに生徒らに考えさせた。伝承施設では津波到達の様子と住民の避難行動を可視化したプロジェクションマッピングで当時の状況を追体験し、生徒同士で自分ならばどうするかなどと意見を交わした。